

白山ふるさと文学賞

第一回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生高学年小説の部 優秀賞

よつば

東明小学校六年

宮田 みやた

茉歩 まほ

受賞の言葉

こんな立派な賞をただけて、とてもうれしく思います。これをはげみに、今後、文学に親しんでいきたいです。将来は医者になってから引退後、命の大切さを伝えられる作家になりたいです。

あーあ。大体、どうしてあたしたち在校生が入学式なんてつき合わなきやいけないわけ？しかも、せすじのぼすのになれてないからせなかのきん肉がすつごくいたくなっちゃう。

私はぐうつと思いつきりのびをした。ごわごわした地味な制服が、かすかにきぬずれの音をたてる。

春のうららかな風が、私のしつ黒のロングヘアをくすぐった。横の原っぱでは、ツクシやタンポポやシロツメクサ、そしてクローバーが一生けん命自己主張している。

クローバの中に四葉のものを探し、私はしゃがみこむ。すると、こんな音が聞こえた。

「ンナーオ、ニヤー」

——ね、猫？の鳴き声？？私は恐る恐る原っぱの中心部に近づいた。カラスがたくさん群れていて、あわれなダンボール箱：いや、子猫におそいかかっている。

『紀州みかん』の文字が入ったダンボール箱には、小さな小猫がいた。あいまいな灰色とすすのように汚れた黒のしまもよう。大ぶりの黒真珠のような瞳はおびえたように見開かれ、せ中には大きな傷ができています。カラスがつまみあげようとしたときにできたみたいだ。何とかして猫を助けないと、食べられてしまう！

私はあわててかさをつかんだ。赤いタータンチェックのお気に入り。これでカラスを追いはらえばいい。

ドストとダンボールに近付くと、カラスと猫は私の姿をみとめた。カラスはガーガーと今まで以上に鳴きわめき、猫はさらにおびえた表情になった。それを見て、心がチクリといたんだ。——よっほど人間にひどいことをされてたんだろう。

「シツシツ、シツ!!」

大声でさげびながらかさをふりまわす。カラスたちはブーイングのようになやかましい音をたてながらにげて行った。

さらに、信じられないことにかさをブンだらけにしてしまった。ああ……。

ため息をつきながらぐったりとした猫をだき上げる。近くで見ると、思った以上に大きな傷だった。獣医につれていかななくてはならない。

私は、家に向かって走りだした。

「野々村」という表札がかかったクリーム色の二階建てが見えてきた。私はかぎ穴の中に銀色のかぎをさしこんでひねった。

「ただいま！」

そうさげび、片手で四苦八苦しながらナイキのスニーカーを脱ぐ。

「お母さん、ちよつと!!」

お母さんが出てきた。しつ黒のゆるいウェーブのかかったロングヘアと大きな瞳は私にそっくりだ。紺と白の細いストライプのワイシャツと、紺色のニットのドルマンカーディガンに紺色のサテンのヘアバンドを合わせている。

「何あわててるの？」

「猫：・ケガしてたから拾ってきた。獣医さんに連れてってくれる？」

「いいけど、まず着がえたら？その間に猫に応急処置をしておくから。」

私は赤いチェックシャツの上に黒い半そでパーカー、ボアが付いたデニムのショートパンツに着がえてきた。

『応急処置をしておく』

と聞いたけど、そこまで本格的ではなく、不格好な大きすぎるガーゼをぎこちなく当てただけだった。

お母さんは、どこから出てきたのかペットキャリーを持っていた。そして、ブランケットを下にひいて猫をのせた。

私とお母さんは、黒い車に乗りこんだ。最寄りの佐竹動物病院に行くらしい。

佐竹動物病院にとう着した。犬や鳥がおどるカラフルな看板の他は

地味な景観だ。

受付のロビーに入る。平日の昼間なので、ひどく空いていて、不気味なくらい静かだ。悪寒がして、私はまくりあげていたシャツのそでのボタンを外し、できるだけ引っ張ってのびした。

あまり待たずに診察室に入ることができた。佐竹院長は大がらで顔の皮ふがたれ下がっていた。まるでブルドックだ。

「どうされましたか？」

と佐竹院長が問いかけた。

「娘が拾ってきたんです。私もけじめをつけたいし、けがだけは——。」何のけじめかは理解できないが、お母さんは答えながら私をじっと見ていた。そして中と半ばに言葉を切ると、今度は佐竹院長のブルドック顔をじっと見つめる。佐竹院長は、すべてを理解したように小さくうなずいた。

大人たちのひみつの話なのかも知れない。でも、お母さんが私の顔を見ていた時点で私にとつていいことではないことは確実だ。内容がよく分からぬながらも自然とふくれっつらになる。

お母さんと佐竹院長はしばらく困ったように顔を見合わせていたが、お母さんがヘアバンドをずり上げたのが合図のように佐竹院長がしゃべりだした。

「まずははばが広いけど、全体的には浅いからちよっとお薬つけたら治ります。包帯とお薬、処方しておきます。」

私はむねをなでおろした。お母さんも、ほほをかすかにほころばせていた。

きれいに洗ってもらった猫は、灰色と黒ではなくて、雪のような白色と闇を切りとったような黒色だった。毛はふわふわだけど、せなかに巻かれた包帯だけがいたいたいしい。

家に帰る車中で、猫はねむってしまった。

リビングに入り、大ぶりのバスケットにブランケットをしいて猫のを

せる。お母さんがぼそりとつぶやいた。

「これだけかわいらしい猫だったら、保健所に行ってももらい手があるでしょうね。」

え？なんで？疑問符がたくさんうかぶ。

ふつう、この猫飼うよね？

娘が拾ってきて、じゅう医連れてって、けが治して。

あなたが言っていた、『けじめ』は、保健所に連れて行く前にけがを治しておくこと？

なにあたりまえのように「保健所」の名前を口にしてるの？

私の動きが不自然にかたまったのを見て、お母さんのくちびるが、（しまった。）

と声を出さずに動いた。

「ウイルスがいたらどうするの？それに、お父さんがネコぎらいなのよ。」

まぶたがさっと熱くなる。こみあげてくるなみだをこらえながら、お母さんを見上げ、いどむようにあごをつき出す。

「病院で検査してもらえばいいじゃない。それに……それに……それに……お父さんはきつと飼ってもいいって言ってくれるよ。」

すると、お母さんも大きなぬれた目で見おろしてきた。

「お父さんがいって言ってくれなかったらどうするの？」

生温かいしずくが二、三てき、ほほの上を通った。それをこらえるために、くちびるをかむ。お母さんはため息をついてソファにこしかけた。

「お父さんなんて——日曜日くらいしか家にいないじゃないやん!!なんでそんな『仕事人間』の好みなんか考えなきゃいけないわけ？」

なみだをせきとめていた堤防がこわれた。まるで滝のようにひっきりなしに流れている。今までいい子のふりをしていたストレスがばく発したんだ。お母さんはおどおどと言った。

「明日香……」

私はだまって、バスケットからブランケットごと猫を出し、ペットキヤリーにていねいに入れた。外からは、ガラスに雨がぶつかる音が聞こえた。お母さんをにらみつけ、言う。

「この子を飼うのをみとめてくれなかったら、わたし、出ていくから。」
わたしはどしゃぶりの雨の中を走りだした。あわてたお母さんは、とりに残された。

かさがないので、私もペットキヤリーもビショビショになってしまった。ゆれがはげしいので、猫は飛び起きて、目を大きく見開いている。

「はあ……はあ」

私は近所の公園の屋根つきベンチにこしをかけ、上がった息を整えた。ペットキヤリーのとびらを開けると、猫は私のひざの上に丸まった。だき上げると、規則正しい猫のこどうが伝わってきた。

トクン……トクン……

ふわふわした毛にほおをすりよせると、なんともいえない安心感がわきあがってきて、なんだかねむくなった。

どれだけたつただろう。

私は、自分の名前を呼ぶ声で目を覚ました。猫をだいたまま居ねむりしていたようだ。

まるで鉄をのせたように重いまぶたを、ゆっくりと押し上げる。せもたれにのせたせ中がちくりといたんだ。目の前には、お母さんとお父さんがいた。二人の後ろには、お父さんの白い車が停まっている。お母さんの瞳はうるんでいて、お父さんはスーツを着たままだ。彼は口を開いた。

「ごめんな、アレルギーでもないのにきらいなんて言って……」

ほっそりとした一重の目が、もつと細くなった。そして、とまどうように大きな手を私の頭にのせてぎこちなく笑う。わたしがにっこりとほほ

えむと、今度はいつものはつきりとした明るい笑顔になった。お父さんの目線はちらりと猫をとらえた。

「飼いたい？」

わたしはこくんとうなずいた。まるまったままの猫は、まるでボーダーのブランケットのようだ。お父さんは言った。

「いいよ。」

「やったあ！」

私は猫をだきしめた。はずみで起きた猫は、やっぱり大人しくのどを鳴らしていた。

日曜日になった。お母さんは花に水をやっていて、お父さんと私はクローバーの上でくつろぐ猫をながめていた。

「お父さん」

「なんだい？」

「猫の名前、決まったよ。」

「何になったの？」

『よつば』だよ。四葉のクローバーのおかげでこの子と会えたし——何だか、幸せを運んでくれそうだから。」

わたしは空を見上げた。空は、真つ青に晴れわたっている。